資料５：

谷口眞子『赤穂浪士の実像』
2006年吉川弘文館 p185

「忠臣蔵」文化の広がり

随筆『宮川舎漫筆』の中には「義士堀部安兵衛書置并鑓」という項目がある。ここには作者と堀部家の不思議なつながりが書かれている。

自分が天保年間に住んでいた本所台所町の向かいには、松平家の家老本多氏の屋敷があった。その家臣忠見次郎右衛門のところに、堀部安兵衛の書き置きや、討ち入りに使った鑓、さらに討ち入りの際の配置の絵図面などがあった。安兵衛は忠見家から堀部家へ養子に入ったので、実家への書き置きである。この品々は討ち入りの夜、鑓に添えて庭先に投げ込まれたという。義士の書状や遺品であると世間でもてはやされる物の多くは、利に走る者の偽作である。忠見氏が伝えるこの品々は、吉良邸の隣家にある実家が所有しているもので、書き置きや形見となった鑓をみると、実際に義士堀部氏に会った心地がして、自ずと感激の涙が流れて止まらない。

資料６：

「武生郷友会誌」
第43号1921年掲載

赤穂義士遺物記

赤穂義士堀部安兵衛金庸余家舊臣忠見扶右衛門弟也初金庸有嗣津輕藩士平野某家之約而未果也一日聞高田馬場有兄弟復父讐之擧馳赴之助兄弟而殪其仇會赤穂藩士堀部彌兵衛金丸過見之而感其義勇强請爲已嗣子既而有藩士淺野長矩又傷吉良義英事獲罪沒邑金丸父子與其老臣大石良雄等相謀日夜焦思遂襲吉良氏邸獲義英首以報故君仇從容就死其忠勇義烈至今使人感奮興起矣忠見氏家世傳堀部父子所携鎗及遺書畫像而畫像係金庸所手寫今主人傳三恐其久而散逸新作櫝以藏之而余家曾與忠見氏有君臣之契因乞文以記之嗚呼今見此遺物尙凛有生氣展覽之間使人不覺正襟危座蓋父子忠勇義烈之迹雖使具然抑亦足以見余家祖先養士之有素也哉

明治庚寅五月男爵本多副元誌

堀部安兵衛親類書　養方

父方
養祖父　仮名ヵ死去仕候年数共覚不申候
同
養祖母　誰娘ヵ死去仕候年数共覚不申候
母方
養祖父　仮名ヵ死去仕候年数共覚不申候
同
養祖母　誰娘ヵ死去仕候年数共覚不申候
養父　浅野内匠家来　堀部弥兵衛
養母　江戸両国橋近所米沢町　同　人　妻
妻　大屋木村一兵衛店ニ罷在候　養母と一所ニ指置申候　堀部弥兵衛娘
伯母　駿府　同　人　姉
伯母　紀州和歌山安藤采女殿家来　青地与五兵衛方ニ罷在候　同　人　姉
従弟　細川越中守様ニ罷在候　堀部甚之丞
従弟　右同断　堀部庄兵衛
従弟　安藤采女殿ニ罷在候　青地与五兵衛
叔父　本多孫太郎様ニ罷在候　忠見扶右衛門
従弟　父扶右衛門方ニ罷在候　同　宗　助
従弟　右同断　同　友四郎
従弟　養母と一所ニ罷在候　同　文五郎

右同人親類書　実方

父方
祖父　古溝口伯耆守様ニ罷在候　死去仕候年数覚不申候　中山弥次右衛門
同
祖母　誰娘ヵ死去仕候年数覚不申候
母
祖父　溝口信濃守様ニ罷在候十九年已前死去仕候　溝口四郎兵衛
同
祖母　溝口信濃守様御由緒之者ニ而先年死去仕候年数覚不申候
父　溝口信濃守様ニ罷在候廿一年已前死去仕候　中山弥次右衛門
母　三十四年已前死去仕候　溝口四郎兵衛娘
姉　溝口摂津守様ニ罷在候　町田新五左衛門（妻脱）
甥　親新五左衛門方ニ罷在候　同　卯之助
姪　右同断　町田新五左衛門娘
叔父　坂井九大夫方ニ罷在候　溝口祐弥
叔父　溝口信濃守様御領内ニ罷在候　上田宗実
叔父　右同断　上田角左衛門
従弟　溝口信濃守様ニ罷在候　坂井九太夫
従弟　右同断　坂井惣太夫
従弟　右同断　窪田兵左衛門
従弟　右同断　堀市郎左衛門
従弟　右同断　河村文太夫
従弟　右同断　河村忠右衛門
従弟　右同断　石林十之助
従弟　右同断　上田九郎左衛門
従弟　父宗実手前ニ罷在候

以上

元禄十六癸未年正月　堀部安兵衛書判　三拾四歳

参考資料：
堀部安兵衛親類書
『忠臣蔵第３巻』
1987